

1 派遣期日 令和5年9月12日（火）

2 派遣先 学校名 国立大学法人 宮城教育大学附属小学校
所在地 〒980-0011
宮城県仙台市青葉区上杉6-4-1
<https://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp/>

3 研修内容

（1）研究主題について

宮城教育大学附属小学校では、研究主題「自ら学びを切り拓く～各教科等における研究の学び～」としている。この研究テーマは、各教科等の特質を踏まえた実践を明らかにすることを目指しており、目指す子どもの姿を、①自分が見いだした問題に対して、前のめりになって向かっていく姿、②自分の考えを得るだけに止まらず、よりよい問題解決、より深い理解を目指して対話を重ね、探求することを通して自ら学びを切り拓いていく姿、を目標としている。

研究計画としては、今年度が1年次であり、研究主題の妥当性等の確認、2年次には研究主題の目標と計画の修正と検証、3年次には授業実践による検証と研究のまとめとして、3年間かけて研究主題を達成できるように取り組んでいる。

（2）公開授業について

今回参加したのは、第3学年4組の体育科学習についての授業研究で、単元はネット型ゲーム、バドミントンを改良した「ばるミントン」を用いた授業であった。「ばるミントン」とは、段ボールで作成したラケットと紙風船を用いて、コート中央に置かれたバーを挟み、互いのコートに紙風船を打ち合う、バドミントンの用具を簡易化したゲームである。この教材の利点として、落下までの滞空時間が長いことがある。



写真1 ばるミントン

児童の調査において、ネット型ゲームはプレーの継続性に課題があることから教材の工夫から研究を始め、授業に取り入れていた。

指導方針については、勝ち負けを最優先とせずに、タスクゲームを取り組ませながらラリーの技術を身に付けさせていく方針としていた。単元の流れを踏まえて、「バールンリフティング」「ウォールラリー」「ペアラリー」と学習し、最後の授業で「ダブルスゲーム」に取り組んでいた。児童の習熟度に合わせて学習内容のレベルを上げていた。また、活動を発展させていく上で、「ゲームの人数が増えたらどのように友達と関わるとボールを返球することができるのか」という視点を与え、ネット型ゲームの攻防について、児童同士が相談したり、肯定的な声を掛け合ったりする探求する姿を目指していた。

公開授業のときは、ゲーム形式を中心とした展開が行われた。準備運動や補助運動では、筋肉や関節をほぐし、児童が進んで用具やコートの準備を行っていた。学習課題を確認した後は、ペアに分かれ、ゲーム形式で試合が行われた。試合後には必ずペアと相談する場面が見られたり、作戦を立てたりする児童がみられ



写真2 ばるミントンコート

た。上手にできていたペアを教員が全体指導につなげ、児童への確かな発問を行っていた。また、悩んでいる児童の中には「落ちてきたボールを自分が取るのか、相手を取るのかわからなくて迷ってしまった。」という意見があった。その解決案として、他の児童が「コートに見えない線を引いて、分担すればいい。」という意見を出し、児童同士の話し合い活動が活発になり、どうすればボールがつながるのか探求している様子が見られた。



(3) 分科会～指導・助言～

塩竈市立第三小学校教頭、鎌田実先生と宮城教育大学保健体育学部会准教授の沼倉学先生から今回の授業についての助言をいただいた。助言の内容として、「教材の工夫や児童への課題設定について」の2つの内容を中心に話を進めていった。

今回の学習で用いられた「ばるミントン」は、児童が楽しく運動を行うことができる教材と称賛していた。第3学年という成長段階に合った教材であることと試合を行う上でルールや環境を児童の実態に合わせて工夫していた点を理由として話されていた。

改善する点として、児童一人一人への課題を明確に設定することが大切である点を話されていた。試合に臨む前に、自分自身の目標を決めてコートに立ち、実践したことがうまくできたかについて自分自身で考え振り返ることが研究テーマである「探求の学び」に深く結びつくものと話されていた。例えば、ボールが段ボールに上手く当たらない児童に対しては、ペアの友達と話し合い、ポジションを変更し試合に臨んだり、下当てと上当てのどちらが得意なのか把握し、その得意なやり方を多く使いながら試合をしたりするなど、その気付きとなるような発問を行うことが効果的だと話されていた。

また、附属小の職員間で話し合っていた内容として、「協力する」という言葉をなるべく使わず、その具体的な内容を教えてあげることが重要なのではないか、という点が挙げられた。「協力する」という言葉の裏には、「右に来たボールは右の人が取る」や「打つ力が強い方が、コートの後ろに立つ」などの意味があり、そのことを具体的に児童の言葉として、認識することが大切である、という意見が挙げられた。児童には、具体的に説明を行わないと思考が漠然とし、目標を立てた気になってしまうため、児童への説明の仕方を教師が工夫することが大切だと分科会で挙げられた。

4 感想

今回、宮城教育大学附属小学校の研究会に参加して印象に残ったことは、教員一人一人の研究に対しての熱意である。研究テーマである「探求の学び」に対して学校として、一丸となって取り組んでいる様子が分科会から感じることもできた。保健体育の専門的な分野だけではなく、様々な教科の「探求の学び」の視点から、附属小学校としての課題を見つけ出すための分科会であった。

自分の専門分野でもある体育の学習について、附属小学校で行われた内容は、本校でも実践できる内容であり、「ばるミントン」においては、簡単な材料で作れるものであった。ネット型ゲーム特有の難しさを克服するためにも、「ばるミントン」の学習は、大変興味深いものであった。特に低学年から中学年の児童を対象にして、運動することの楽しさを感じ取ってもらうことは非常に重要なことだと感じた。

今回参加した宮城教育大学附属小の研究会で得られた授業改善のヒントをもとに、「探求の学び」を育んでいきたい。また、自己の課題設定や教材の工夫を心がけ、他教師にも広げ、校内研修でも伝えていきたいと考えている。